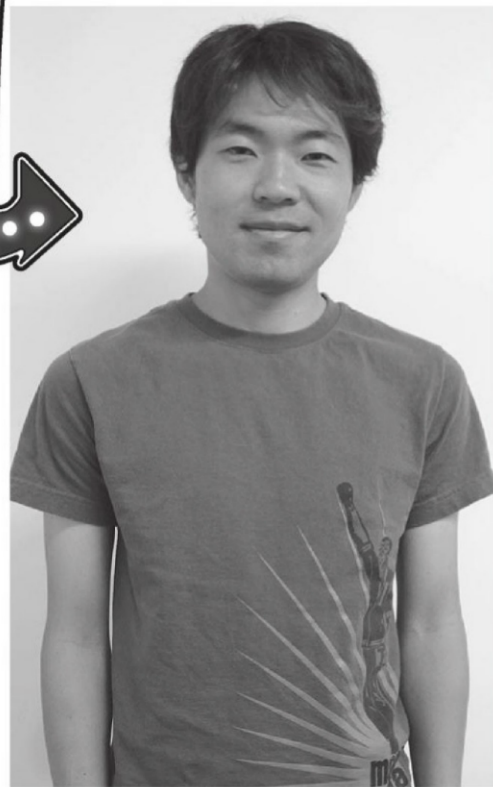


「チャレンジャー」

人生は挑戦の連続。さまざまな課題に挑戦し、乗り越えていくことで人は成長していきます。このコーナーではそんな人生のあらゆる局面で「無二挑戦」続け輝く人を紹介します。



今回の挑戦者

渡米から13年、ようやく踏み出した一歩 監督として僕にしか撮れない作品を撮りたい

映画監督のじゅんやさん
寄野準也さん

大学受験の直前、家族旅行でロサンゼルスに来ました。Universal Studios Hollywoodで参加したスタジオツアーで映画の制作現場を見た時、「映画はこんな風に作られているんだ。この現場で働きたい」と強く思いました。人生で初めて挑戦したいことに出会った瞬間でした。

大学受験の直前、家族旅行でロサンゼルスに来ました。Universal Studios Hollywoodで参加したスタジオツアーで映画の制作現場を見た時、「映画はこんな風に作られているんだ。この現場で働きたい」と強く思いました。人生で初めて挑戦したいことに出会った瞬間でした。

親は家族旅行でロサンゼルスに来たことを後悔してしまいました。Santa Monica Collegeを経て、05年California State University, Long Beachのテレビ・映画学科へ編入しました。苦手だった英語のエッセイが通らず、同級生と比べて1年余計にかかってしまいました。その間に現場で通用するスキルを身に付けようと、インターンとして撮影現場での手伝いを始めました。両

大へ編入した年、グリーンカードが抽選で当たりました。ラッキーでしたね。インターン先からも働かないかと誘っていたので、学校にいながらも映画業界に足を踏み入れることができました。同じ時期、紀里谷和明監督の『CS:NY』がDreamWorksで再編集されることになりました。その撮影でフルタイムの日本人アシスタントを探しているというインターン先のプロデューサーが教えてくれました。このチャンスは逃さないと思いながら、ようやく入った大学を休学すべきか迷いました。大学の先生に相談すると、諸手を挙げて賛成してくださり、授業に参加できなかった映画編集期間の4カ月を単位として認めてくれたのです。

卒業後は、紀里谷監督やインターンをしていただいた制作会社にスムーズに入りました。Universal Studios Hollywood内にあるDreamWorksの仕事をしていました。『The War of the Worlds』の撮影中だったスタジオ・スプリング・ヒルバーク監督と俳優のトム・クルーズ氏が目の前を歩いていました。かつて夢に描いた場所で仕事をしているんだと感慨深かったです。

制作が始まったのは12年でしたが、構想はその3年前から練り始めました。アジア人を主人公にアメリカン生活で感じているアジア系アメリカ人の葛藤や彼らに対する偏見を描きたかったんです。ところがアジア人が主人公の映画は大きな配給会社には相手にされず、予算集めには苦労しました。結局、予定していた半分の予算で、脚本やロケ地を変更して、最低限のスタッフで撮

「CS:NY」の制作が決まった時は、僕の作品が目の前に来たかと思いましたが、と監督さん

たかのように、何もかもが上手くいきませんでした。自分が企画した映画はごくごく予算が集まらず撮れない。ほかの方の作品のアシスタントや、映画学校での講師、広告などの単発の仕事をしてながら生活してきました。この暗黒の時代に僕の精神面を支えていたのは、「自分の映画を撮る」という僕を信じてアメリカへ送り出してくれた両親や、今までお世話になった方へ恩返しをしながらいけないという良い意味でのプレッシャーだったと思います。

12年、ようやく初の長編映画『Step Dada』の制作が決まった時点からアシスタントディレクター（以下AD）の仕事です。断りました。監督というポジションに就くからには、監督としての仕事のみをすべきだと思っただけです。ADの仕事は続いている限り、周りは僕のことをADとしてしか見てくれませんが、同作の予算のことを考えると、1ドルでも惜しく、本当は目の前に来た仕事には飛びつきたいくらいでした。とねえ。

影しました。それぞれが役割を掛け持ちしているため、1年間の制作期間は怒濤のように過ぎました。幸い大きな映画祭でも公開され、出だしは好調11月からの一般公開もつまづくことを願っています。13年かかりましたが、ようやく長編映画を撮るといふ第一の目標を達成できました。一筋縄ではないが、業界なので、次の作品まではまた6年、7年と間が空くかも知れません。それでも、監督として経験を積みながら、僕が撮るべき作品を模索していきたいと思っています。



「CS:NY」の制作が決まった時は、僕の作品が目の前に来たかと思いましたが、と監督さん

©「シャニムにチャレンジャー」は毎月1日号掲載